長野賞論文

精神看護学における学生の主体性を支援する教育実践の試み

仙田　志津代*

Implementation of Education for Supporting the Independence of Students in Psychiatric Nursing

SENDA, Shizuyo

Summary

The purpose of psychiatric nursing is not only to solve problems in the field of psychiatry but also to promote an understanding of psychiatric health that is basic to all individuals. The underlying goal of this research is to strengthen the role of psychiatric nursing education so that it can train nurses who can provide the kind of support and assistance to patients that will enable them to actively lead the kind of life they aspire to.

To achieve these goals, this study explored various types of task-based learning activities that could be implemented in the education of psychiatric nurses. Task-based learning was selected for implementation because it is a method that encourages students to independently undertake the learning of presented tasks and thus focuses on allowing students to develop their own motivations for learning.

Specifically, during class each student engaged in self-reflection through undertaking learning tasks and activities designed to promote understanding of issues pertaining to mentally disabled individuals. These tasks included the use of newspaper articles related to these issues selected by the students themselves, application of audiovisual teaching materials, and process recording.

These classes all aimed to provide opportunities for students to participate actively and think independently. Specifically, the instructor first presented tasks to students, compiled issues obtained from the records submitted by students, and then made use of the issues that were compiled as teaching material.

The study analyzes the results of the teaching/learning activities and their impact on nursing students and further proposes issues for future consideration and investigation. One of the conclusions of the study is that task-based learning is effective not only in the teaching and training of students in psychiatric nursing, which was the focus of this study, but that it may also be a valuable approach in a variety of adult learning programs.

＊東洋英和女学院大学大学院　人間科学研究科　人間科学専攻　修士課程　2006年9月修了生
M.A. in Human Sciences, Department of Human Sciences, The Graduate School of Toyo Eiwa University, September 2006

キーワード：精神看護学、成人学習、課題学習、学生の主体性
Keywords：psychiatric nursing, adult learning, task-based learning, student autonomy

1. はじめに

筆者は長く看護基礎教育を経験し、その中でも精神看護学教育には看護教育全般に活用することのできる、看護する人と看護される人との関係を形成する教育の基盤が存在すると考えるに至り、精神看護学教育の方法について研究したいと考えた。

平成8年に看護教育カリキュラムが改正され、精神看護学は精神科看護から独立して、一つの教育領域として独自性を確立することが求められた。

精神看護学が精神科看護から独立した背景には、現代社会が抱える心の健康問題を量的、質的に再考した結果であると考えられる。

たとえば、精神看護の対象が、精神科領域の問題を持つ患者や精神障害者のみならず、災害や事故などによる突然の衝撃によって心の安定を失い、苦しむ人々や過度のストレスなどに悩む人々が対象になっていることも、精神看護学が精神科看護から独立した背景になっている。

そこで本研究では、精神看護学の教育方法について検討し、幾つかの具体策について、実証研究をしたいと考えた。

2. 研究の背景

近年少子高齢化が急速に進み、国民の価値観が多様化するなど社会はめまぐるしい変化を遂げている。

特に医療を取り巻く環境では、安心できる医療を求める声が一層高まっている。その結果看護分野では、患者の生活の質の向上のために、質の高い看護判断と看護技術の提供、および看護師の専門性を活用した在宅医療の推進が求められている。

このような中で看護教育では、今まで以上に責任感のある主体的な専門看護職の育成が求められており、中でも精神看護教育の改善が今後の大きな課題となっていた。

一方で近年看護学校に入学する学生にも、生活習慣や生育環境の変化、価値観の多様化が見られ、学生の生活や技能自体にも著しい変化が見られるようになっている。また、社会人学生の受け入れなど学習機会を拡大した結果、看護教育の現場である看護学校には高年齢の学生も増加し、他の職種や子育て経験者など、さまざまな背景をもつ学生が存在するようになっている。加えて男子学生の増加も近年の特徴といえる。

以上のような背景から、看護教育を担う教員は、年齢、性別、生活背景の異なる学生に、どのような看護教育を行っていくことが望ましいのかを検討していくことが今後の大きな課題となっている。

2. 1. 看護教育の特徴と課題

看護教育の特徴は、3年間の教育課程の総時間数2,895時間のうち、臨地実習教育に総時間数の三分の一に当たる1,035時間を費やすことにある。

臨地実習教育とは、学内で学んだ知識と実務を統合する教育であり、職業教育や技術教育ともいわれ、看護教育の中で大変重要な教育となっている。

中村は（1992，p62)、「臨床で患者とかかわり、その状況の変化に対応しながら、経験を通して自分なりに判断し、自分なりの方法でかかわり、その中で自分が変わり成長していくことになる」と述べている。したがって、臨地実習の教育方法を充実させることは、看護教育の大きな課題といえる。

このような中で、教育者が看護を学生にどのように教え、伝えていくか、また学生が看護をどのように学ぶべきか、そして教育者が学生をどのように捉え支援していくかということが、

今後の看護教育の課題である。

2. 2. 成人教育としての看護教育

看護教育では、看護の臨床能力の1つとして看護の状況における判断力が上げられる。そのため看護教育では、学生の判断能力をいかに養成するかが、重要な課題になっている。

研究対象にした看護教育の授業には、社会経験や生活経験が豊富な社会人学生もいるが、中心は高校卒業直後に入学した若い学生であり、その中で、社会経験や生活経験が不十分な学生が、年々増加している。

そのような環境下では、教師は学生の主体性を養うために、学生を一人の成人と見なし、学生の判断能力を信頼してかかわることが重要になってくると考える。すなわち成人教育としての看護教育が重要であると考える。

たとえばP．クラントン（1999）は、成人を「生物学的な年齢に関連づけることではなく、社会的な意味で自立している成長した状態にある人」とし、成人学習者を「自己主導的な存在を目指して学んでいる人」と定義づけている。そこで本研究においては、教師が学生を成人学習者として捉えるためには、教師の持つ学生観の転換を図らなければならないことを明らかにしたいと考えた。

2. 3. 教育のペタゴジーとアンドラゴジー

M・ノールズ（2002、p513）は、成人学習者の特徴として「学習者の概念」、「学習者の経験の役割」、「学習へのレディネス」、「学習への方向づけ」の4つの要素を示している。

そして、「子どもを教える技術と科学」をペタゴジー、「おとなの学習を援助する技術と科学」をアンドラゴジーと名づけた。

つまりアンドラゴジーは、「初めから自己決定的な学びになるのではなく、経験に伴う発達課題達成に向けてのプロセスをとおして豊かな学習経験を蓄積するものであり、教科書中心から課題達成の方向へ、自己決定的な学習を見出すもの」と説明することが出来る。

また、M．ノールズ（2002、p38）は、「アンドラゴジーとペタゴジーは、単一的な見方をするのではなく、学習プロセスの中でペタゴジーからアンドラゴジーへと移行していくものであり、最終的にアンドラゴジーの目標を達成できる考え方として捉えることができる」とも述べている。したがって学習内容によっては、成人学習にもペタゴジーの学習が適当であるといえる。

2. 4. 真の看護教育

もともと看護とは、患者と看護者が向かい合い、互いの経験を理解し、受容することによって信頼関係を築き、これを基盤に患者の状況に合わせた、看護技術を実践する職業である。
したがって看護教育においては、教師は学習の中で学生自身の経験を活かすように指導する必要がある。

たとえば看護教育の臨地実習では、学生は患者との間で生じる出来事の経験を活かし、そこで生まれた信頼関係の中で患者にとって相応しい看護技術を判断し、それを実践することによって判断能力を学習していくのである。そして、学生は自分の判断を振り返り、その一連のプロセスをとおして、学生は看護者としてだけでなく、一人の人間として成長を遂げていくのである。この人間としての成長を支援していくことこそ、専門職教育としての真の看護教育といえる。

3. 本研究における教師の役割

看護を将来の職業として選択し入学してくる学生らは、他者の役に立ちたい、援助したいという強い動機をもっている。

すなわち「自分がケアすることで、自己実現を図りたい」という思いがその基盤にある。そこで教師は、学生の自ら考え学ぼうとする意識が継続するように支援をしていくことを求められる。

先述したM．ノールズ（2002）は、「人間が成長するにつれて、依存的状態から自己決定性

が増大していくのは自然なことであり、教師は、この変化を促進し、高めるという責任をもつ」と述べている。

したがって「学生の成長」を目標とするならば、主役は学生であり、目標達成のために支援する教師は、脇役である。その脇役として、学生の成長を促す支援について吟味していくことが求められている。

3. 1. 教育方法としての課題学習

布佐（1997、p16－23）らは、看護教育の中で最も重要なのは、「学生が自分の学びを自分の中で価値づけることができるような学生と教師間の相互関係のありかたである」と述べている。

つまり教育とは、学生に、学ぶことを通して、物事の本質的な意味あるいは自分の考を、自己の中に根づかせることだといえる。

したがって、教師と学生が、学ぶ体験を通してその相互関係の中で互いに成長していくならば、「教えること」と「学ぶこと」は相互関係として成立する。

そして、教師と学生が互いの状況を知り、互いの価値を認めあうことができれば、それは教育の中から生まれた真に互いの成長を育む関係性であるといえる。

本研究では、以上に述べた教育を実践する方法として、課題学習を取り挙げた。課題学習では、教師が課題を提示し、学生はその課題に取り組む。そして教師は課題の結果を受け取り、次回の学びにつなげていく。

本研究では、この一連の過程を繰り返すことが、教師と学生の互いの成長には必要不可欠であることを明らかにした。

3. 2. 精神看護学における教育の重要性

精神看護学は、人間の精神の構造と機能の理解を基盤に、主として精神の健康の保持・増進、精神障害の予防および精神障害者に対する看護を総合的に研究することをねらいとしている。

しかし精神看護学は、精神障害者への偏見と医療制度の改革の歴史の上に成り立ってきたことも事実である。

したがって、精神看護学の教育においては、患者の人権を尊重し、倫理的配慮が充分なされた上で看護援助を提供していくことの必要性を、教育することを忘れてはならない。

坂田（1989）は、「学生は授業や実習前の学習によって、精神障害者に対する漠然とした不安を減少させていく。さらに実習を通して精神障害者のイメージが肯定的なものに変化したり、対象の理解を深めていくことが可能である」と述べている。

また仙田ら（2006）も、学生が最初に抱く精神障害者に対するイメージは、授業や臨地実習の影響を受けて変化することを明らかにしている。

3. 3. 精神看護学における教育方法

精神看護教育において、学生に精神障害者の理解を促すために、視聴覚教材の活用がなされており、また数年前からは、精神障害者自身が授業に参加し、学生の対象者の理解を深めているという内容が報告されている（中谷他2003、池邉2002、米澤他2001）。

精神障害者自身が授業に参加したケースでは、当事者の話には、教科書や視聴覚教材からは得られない説得力や学生の心を揺さぶるものがあり、学びの深さが増したと考えられる。

精神看護学では、人とのかかわりをとおして、自己を知ることや、行ったことへの振り返りを行わせ、自己を見つめる学習を行わせている。

自己の振り返りについて、P．クラントン（2003，p204）は、「自己の振り返りは、今までの自分の価値観や考えてきたことへの批判的思考をとおして、自己への問いかけをすることである。その結果、正当化、変更、否定の方向に向かうことになる」と述べている。

また意識変容の学習について、三輪（2006，p 137）は、「自己を批判的に振り返ることは、人生経験の浅い学生には難しいことかもしれないが、学生なりの経験の中で培われた考えを、時には見直し修正していくことで意識変容の学習になるのではないか」と述べている。

すなわち看護教育においては、常に他者と自己をとおして、自己を見つめること、また振り返ることが求められているといえる。

看護教育の現場では、学生の自己洞察力を高める方法として、これまでもプロセスレコードやロールプレイ等の教育方法を実践してきた。

本研究では、これらの教育方法について実践研究によって評価し、その効果と問題点を明らかにする。

4. 研究の方法

本研究では、看護教育において学生の主体性の育成を支援するために、「新聞記事」、「視聴覚教材」、「プロセスコード」を用いた授業を実施した。

授業の振り返りを通して精神看護学教育における成果を明らかにし、その課題について検討するためである。

4. 1. 研究対象

看護短期大学3年課程の42名（うち男子2名）

表1　研究対象の人数

単元	対象者	人数
1	看護短期大学3年課程:2年生	42名
2	看護短期大学3年課程:2年生	42名
3	看護短期大学3年課程:2年生	31名

4. 2. 研究期間

2004年9月1日～2006年6月30日

4. 3. 授業の単元と教材

授業の単元と教材の関係は表2のとおりであり、その概要は次の通りである。

(1) 心の健康を理解する：精神看護学Ⅰ（概論）

現代社会で起こっている事象を取り上げ、心の健康について考えることを目的として、新聞記事を教材とした。

(2) 統合失調症患者の看護について理解する：精神看護学Ⅱ（援助論）

統合失調症患者が主人公になっている映画を用いて、実際の患者の看護について考えさせることを目的として、視聴覚教材（映画）を教材とした。

(3) 自己の振り返りについて理解する：精神看護学Ⅱ（援助論）

学生が経験した日常生活を場面として取り上げ、他者との相互関係をとおして自己を振り返ることを目的としたプロセスレコードを教材とした。

表2　授業の単元と使用教材

	単元	教材
1)	心の健康を理解する	新聞記事
2)	統合失調症患者の看護について理解する	視聴覚教材（映画）
3)	自己の振り返りについて理解する。	プロセスレコード

4. 4. 教育方法

課題を提示し、学生自身が自ら考える課題学習を用いた。

4. 5. 授業方法と分析方法

(1) 新聞記事を活用した授業

42名の学生を3～4名ずつにグループに分け、グループごとに健康予防に関する新聞記事を集めた。その上で、その記事を選択した理由を書かせ、興味・関心に沿って内容を整理させ、気づいたことや、考えられたことを文章化させた。

教師は学生が新聞記事を通して、グループ学習した内容を、Newspaper in Education（以下NIEと略す）の6つの視点（社会への興味・関心が高まる、思考が深まる、多面的な見方・考え方が身につく、新聞に興味・関心をもつ、他人の意見を聞くこと、自分の意見を発表することで自分の考えを持つようになる）に基づいて類型化し、分析した。

(2) 視聴覚教材を用いた授業

学生に映画を見せ、精神看護における7つの課題（精神障害者の理解、心の病をもつ人の理解、精神の看護についての考え、ケアをする家族・周囲の人たちのかかわりについて、感想、精神障害者に対する興味、精神看護に対する興味）を提示し、それぞれに記述させた。

その上で教師が学生の記述内容を1文章1内容でカード化し、類似内容を分類した。

また教師は学生が記述した統合失調症患者の看護内容について整理し、それらと教科書の統合失調症患者の看護内容とを比較検討した。

(3) プロセスコードを活用した授業

学生に、学生と患者との会話場面を見せ、その内容をプロセスレコードに記述させた。教師はプロセスコードの記述内容から、学生が選択した場面・その場面を取り上げた理由・気づいたことをまとめ、対人関係について記述した類似内容を分類した。

その上で学生に、プロセスレコードに記述した内容を、6つの視点（なぜ再構成しようと思ったのか、どのような背景があるのか、どのような対人関係があるのか、看護にどのように生かせるか、気づいたこと、自己評価）から評価させた。

4. 6. 倫理的配慮

学生が記述した内容については、研究のために使用すること、授業の振り返りや今後の授業で活用することを口頭で説明し、研究に使用することに同意を得た。その際本研究の対象者である学生の匿名性の確保、データの保管には細心の注意を図る旨を述べた。

5. 新聞記事を活用した授業

5. 1. 授業の概要

授業科目：精神看護学Ⅰ（概論）30時間(15回)

授業開始時に新聞記事を活用して3分間スピーチを実施した。

5. 2. 授業のねらい

新聞記事を用いた授業研究としては、医療事故の記事を比較検討した研究（鈴木2004、藤原2003)、新聞ノートの導入に関する研究（森田　2004)、論評記事の見出しを分析する研究（小林　2003）などがすでに行われている。

しかし、学生が関心を持つ心の健康に関する記事に焦点をあて、学生が自ら新聞記事を選択し、その内容について分析するという研究は見当たらない。

本研究では、まず学生がどのように新聞記事から心の健康問題を捉えられたのかを学生の3分間スピーチのレポートから分析した。そして次に、心の健康について、ＮＩＥの視点に沿い学習という視点から分析した。

5. 3. 新聞記事を用いた授業の結果

(1) 新聞記事の見出しの分類

学生が選択した記事は、心の健康に関する記事が5件、障害者に関する記事が3件、災害に関する記事が2件、親子間で起こった事件に関する記事が1件だった。そこで、筆者は学生が選択した記事を「心の健康」、「障害者」、「災害」、「親子関係」の4つに分類した。

(2) 選択した新聞記事に対する興味・関心について

分類された結果を基に、学生が選択した新聞記事に興味・関心を持った理由について分類した。

学生は「子どもが親の心を支える記事に興味をもった」、「最近話題になっている、動物が医療にどのように関わるのか知りたかった」、「現代人のストレスに対して興味をもった」、「授業で自殺について学び、タイトルにインパクトがあった」、「まだ教わっていない言語障害について興味を持った」、「授業で心の絵を描いたことがあり、同じ題材に興味をもった」等を、新聞記事の選択理由として挙げた。

この結果から、学生の身近に起こっている出来事や、同年代が加害者となっている事件、また、新潟県中越地方の地震による被災者の今後

の動向、さらに、障害者自身が語る障害や子どもと親の心を支える人たちへの興味・関心が高いとことがわかった。

(3) 新聞記事から捉えた心の健康に関する気づき

学生が記述した内容を分類した結果、学習の気づきは、以下のようになった。

① 傷つき悩む心は、関わりこそが力になる
② 相手の気持ちになって考えることが大切である
③ 話を聞いてもらうだけですっきりする
④ 親は、親の存在が子どもの心にどのように影響しているのか理解することが必要である
⑤ 自分では感じないことでも、ストレスになり身体に影響を及ぼしていることがある
⑥ 動物と触れ合うことで、心の健康を保つことができる
⑦ 厳しい災害の状況が、日常生活を脅かす
⑧ 障害があるからこそできることがある
⑨ 障害をもつということを、自分の問題としてとらえる厳しさ

学生は興味・関心のある新聞記事を読み、その中から多くの新しい情報を得て、他者への理解や思考を深めていこうとしていることがわかった。

5. 4. NIEの視点からの分析

学生が新聞記事によるグループ学習を通して学んだ結果を、NIEの視点から分析した。

(1) 第1段階分析のNIEの視点

まず第一段階の分析として、新聞記事を活用した授業から得られたデータをＮＩＥの大きなカテゴリーにより分類した。その結果は次の通りでる。

①社会への興味・関心が高まる

「新聞記事に興味をもって世の中のことを考えることができた」13枚（10.0%）

「世の中の出来事に興味をもった」3枚（2.3%）

「心の病がこんなに多いとは思いませんでした」1枚（0.7%）

②思考が深まる

「新聞の情報から知識が得られる」32枚（24.8%）

「情報を得ることができた」10枚（7.7%）

③多面的な見方・考え方が身につく

「新聞を違う考え方で捉えることができた」3枚（2.3%）

④新聞に興味・関心をもつ

「新聞を読む機会が増えた」19枚（14.7%）

「新聞の見出しはとても大切だということがわかった」1枚（0.7%）

「印象に残った新聞記事」11枚（8.5%）

⑤他人の意見を聞く

「他人の意見を聞くことができ、自分にはなかった意見が得られた」20枚（15.5%）

「新聞記事に関して他学生の感想や意見を聞くことができて良かった」5枚（3.8%）

「友達との意見の共有を大切にしたい」2枚（1.5%）

「友達を通して自分の知らない知識を学べた」5枚（3.8%）

⑥自分の考えを発表することで自分の考えをもつようになる

「自分の考えを言えるようになった」3枚（2.3%）

「他人に思ったことを伝えるのは難しい」1枚（0.7%）

以上の結果から、新聞を活用したグループ学習には、NIEの効果である「学生の主体的な学習能力の向上」につながる内容が示されていることがわかった。

(2) 第2段階の分析のNIEの視点

第一段階の分析で、「思考が深まる」が33枚(23.7%)、「他人の意見を聞くこと」が32枚(23.0%)、「新聞に興味関心が高まる」が30枚(21.5%) であることがわかった。

また、「多面的な見方、考え方が身につく」が16枚（11.5%)、「社会への興味関心が高まる」が15枚（10.7%)、「自分の考えを発表でき自分の考えを持てた」が14枚（10%）であること

もわかった。

したがって、新聞記事を活用したグループ学習は、「自ら学び考える力」の育成につながり、これはNIEの効果といえる。

NIEの目的は、「児童・生徒の識字率を向上させ、主体性のある人格の形成を目指すこと」であり、これは世界各国に共通する目的である。日本の実施結果からも、明らかに学習態度に変化が見られている。

また、NIEの視点から分析した結果、「自ら深く考え、決断し、行動するという主体性と同義語である自主性」、「問題の発見、問題の解決を促す創造性」、「価値を求める感性と同義語の感受性」、「協力して仕事を遂行するという協働性」の4つの側面から、学生の持つ主体性の構造が成り立っていることがわかった。

したがって、NIEによる学習は、学生の学習態度をより主体的に導いていく学習法であることが明らかになった。

5. 5. 新聞記事を活用した授業の結果と今後の課題

(1) 新聞記事を活用とした授業に関する考察

本研究の授業において、新聞を活用した理由は、NIEの視点による分析のためだけではない。新聞記事は現代社会で起こっている事件、出来事、政治などがわかりやすく、具体的に表現されているため、学生が選びやすいのではないかと考えたからである。

また、学生が選択した新聞記事から抽出した内容をNIEで分析した結果から、学生の主体性の構造に「自主性」、「創造性」、「感受性」、「協働性」の4つの側面があることがわかった。

すなわちNIEによる学習は、学生にとって貴重な体験であり、効果的な教育方法であるということが示された。

学生が選択した新聞記事の内容について、心の健康、障害者、災害、親子に関するものであった。つまり、いずれの記事も人間の心やそれらの関わりに関連した記事を選択しており、自分自身や、他者に対して心身ともに適応しながら生きていこうとしている記事に焦点があたっていた。

したがって、学生は新聞記事を活用した授業をとおして、学習目標である「心の健康について理解する」ということを達成することができたと考えられる。

(2) 問題点と今後の課題

新聞記事を活用した授業の問題点は、グループ学習の授業時間が少なかったことである。学生が新聞記事を選択し、3分間スピーチで発表するまでの間、グループ学習を実施したが、現在の授業には、グループ学習を取り入れる時間が少ないため、学生はグループ学習に慣れていなかった。

特に精神看護では、精神障害者にレクリエーション活動やグループミーティングといった集団療法や、リハビリテーションとして日常的に行われている作業療法が実施され、その中で看護師が援助的役割を果たすことが多い。

そこで、今後、精神看護の教育方法として、グループ学習の方法やグループダイナミクスについて検討し実践していくことが必要である。

6. 視聴覚教材を活用した授業

6. 1. 授業の概要

授業科目：精神看護学Ⅱ（援助論）60時間（30回）の20回目

映画教材「統合失調症患者の看護」の授業で映画教材を用いた。

6. 2. 授業のねらい

授業は、教材を媒介として教師と学生、学生と学生の相互関係を築く場であり、学生が主体的に学ぶ喜びを見出していく場である。教師は授業計画を立案する際、学生の可能性や主体性を引き出す教材を選択していくことが求められている。

一方現代の多くの学生は、情報をテレビ映像から得ている。このような学生には、「読む」、「書く」、「聞く」学習よりも、（映像を）「見る」学習の方が、授業内容が理解されやすい。また

映画教材には、「直接経験しにくい情報を提示できる」、「注意を集中させる」、「学習意欲を高める」効果がある。

本研究の対象にした授業では、映画教材として「ビューティフル・マインド」という映画を用いた。

屋宜（1999、p24－25）は、視聴覚教材の使用目的と意義について、「基礎教育におけるメディアの位置づけの中で、視聴覚教材を使用することによる具体的な描写や、事実や創造は、感性の発展は、よりいろいろなものを理解するときに現実の体験を通して創造をすることができる」ことであると述べている。

そこで本研究では、学生が経験しにくい統合失調症患者の実態を、映画を利用して実際に近い形で提示することによって、患者についての学生の理解を促すことにした。映画を見ることにより、治療の実際や、家族や周囲への影響を含めて看護の実態をイメージしやすくなり、映画を見た感想を学生間で共有することにより、人間理解が深まると考えたからである。

具体的には、映画の視聴後、学生に感想文を書かせ、学生が記述した内容について分析した。

6. 3. 教材の内容

本授業で活用した映画は「ビューティフル・マインド」である。1994年にノーベル経済学賞を受賞したアメリカの数学者、ジョン・フォーブス・ナッシュ・ジュニアの伝記を映画化したものである。

この映画を用いた理由は以下の3点である。

(1) 統合失調症患者の発症から、治療、急性期、慢性期、回復期における患者の状態や、家族や周囲の人たちの関わり、環境などを知ることができる。

(2) 妻の夫に対する関わりにおいて統合失調症の慢性期における看護の基本が描かれており、統合失調症に対する家族の理解が患者の回復に大きな役割を果たすことが描かれている。

(3) 統合失調症という病気が、長い経過をたどる慢性疾患であることを再確認できる。したがって、映画をとおして看護の理解につながる。

6. 4. 結果の考察

映画を見せる前に、教師が映画の内容を説明するようなことはせず、学生に映画を直接見せた。しかし教材を視聴中、殆どの学生は画面を凝視していた。主人公が幻覚と妄想に翻弄される場面では、主人公と自分を重ね合わせ、衝撃を受けている学生もいた。

また、献身的な看護をする妻の苦しみや、夫の病気を理解し受容しようとする姿に、涙を流している学生もいた。

さらに、教師であった主人公が、ゆっくりと時間をかけて再度教壇に上り、学生や周囲に受け入れられていく過程や、最後にノーベル賞を授与された時の場面では、教室の中に感動の渦が沸き起こった。そして映画が終了した直後に、これは実話であることを伝えると、感嘆の声が聞かれた。

視聴後、7つの課題（精神障害者の理解、心に病をもつ人の理解、精神看護についての考え、ケアをする家族・周囲の人たちの関わりについて、感想、精神障害者に対する興味、精神看護に対する興味）について記述させた。学生は私語もなく、熱心に課題に取り組んだ。この姿から、感動を与える授業は、学生の学びを深めることを実感した。

学生が記述した内容の中から、本授業では、糸賀ら（2004）がカテゴリー化した、「精神障害の理解」、「心の病をもつ人の理解」、「精神看護の理解」、「ケアの担い手の理解」、「人間の理解」を学んだことが明らかになった。

また学生は既習の知識から「精神疾患の症状とその影響」を理解し、映画の内容から、「妄想と幻覚に巻きこまれている段階」、「現実を知り他者への信頼と妄想・幻覚と共存している段階」、「妄想・幻覚に惑わされなくなる段階」という精神障害者の辿る過程を理解していることが示された。

さらに、ケアの担い手の理解については、糸

賀ら（2004）も述べている「回復に必要なものは愛と支援である」ことを学び、精神看護における態度の形成が行なわれていたことも示唆された。

最後に、学生の統合失調症患者への理解についての分析を実施した。まず、学生が記述した内容を1文章1内容で抽出した。次に、そこから抽出した71の内容をカード化し類型化した。

その結果、「患者さん自身がつらい病気であること」、「脳に障害があるため、思考や感覚に異常が発症する疾病」、「患者だけでなく家族や周囲の人たちにとってもつらい病気である」、「精神障害で大切なことは、患者さんが病気を受け止めてきちんと治療していくこと」、「周囲の人や家族の支えが大切であること」、「本人が自分の病気を受け入れるまでには時間がかかること」、「薬などの治療によって、病気が完治しなくても日常生活を送れる状態であること」という内容が抽出され、映画をとおして、病気の経過や特徴を学ぶことができたことが明らかになった。

また、看護について分析を実施した。学生が記述した102の内容をカード化し、類型化した。その結果、「幻覚と妄想が強いときには、現実に戻すかかわりが必要」、「家族や周囲のかかわりが大切」、「患者さんだけでなく家族のケアも大切で、話を聴くことで気分が楽になり、安心して日常生活が出来るようになるような関わりが大切」、「患者の言葉を否定するのではなく理解していくことが必要」、「あきらめないで時間をかけて関わることが大切」、「患者さんの心に耳を傾けていくことが大切であること」というような、精神看護学の技術でもある、人間関係を形成する技術の内容が多くみられた。

統合失調症患者の看護についての教科書の考察には、病気のそれぞれの経過、治療、幻覚や妄想のある患者との関わり、社会支援体制などについて書かれている。

本研究において、学生が記述した内容を分析した結果、上記に示した教科書で習う内容と、学生が記述した内容が一致していることがわかった。

すなわち映画を見せる授業によって、学生が正しく自らの学びを深めたといえる。したがって、視聴覚教材を活用した授業では、学習目標を達成することが出来たと考えられた。

6. 5. 問題点と今後の課題

本研究では、学生が記述した内容を学生自身に整理させた分類したので、学生の学習内容を明確にすることができた。しかし学生間の意見交換をさせなかったため、それぞれの学生が、どのような考えをもったのかを聴き合うことができなかった。

一般に、意見交換を実施することにより、互いの価値観をみつめることができると考えられるので、意見交換の時間を持つことが必要であったと考える。

また、意見交換を実施することによってコミュニケーションの学習を実践することができることから、今後この授業においては、意見交換の時間を設けることにしたい。

7. プロセスレコードを活用した授業

7. 1. 授業の概要

授業科目：精神看護学Ⅱ（援助論）60時間（30回）の25回目

7. 2. 授業のねらい

精神看護においては、看護師は、精神障害者の言動を理解するだけでなく、どのように受けとめ、いかに反応するかが重要であり、それが次の精神障害者の師の言動や行動にも大きな影響を及ぼす場合がある。

そのため、看護師は精神障害者とかかわるとき、患者に対する言動に充分注意し、場面ごとに、患者と看護師のやりとりを振り返ること必要がある。

精神障害者の病は、心の病であり、傷ついている部分が目に見えるわけではない。そのため、看護師は患者の言葉を心の表出として捉え、それを客観的にとらえ、患者の気持ちに添った看

護を提供していくことが、精神看護の技術の目標といえる。

看護教育において、このような技術を獲得させるには、自己の振り返りを行わせるプロセスレコードによって、患者と看護師の関わり場面を再構成し、見直すことは、患者に対する援助の方向性を見出すきっかけとなる。

川野（2006、p31）は、自己の振り返りについて、「看護師と患者との関係の中で、看護師は自分自身に対して、患者には、推察の中で相手の気持ちをとらえていくことで相互理解が深まるということである」と述べている。

しかし、自己の振り返りをすることは、自分の長所や短所、また、否定したい側面までさらけ出される可能性があるため、決して容易なことではない。

他者から指摘された場合などは、受け入れがたい事実をつきつけられた形になる。しかし、精神看護では、自己を振り返り、ありのままの自己を受け入れることが求められており、そうすることで、他者をも受け入れることができるからである。

これは、看護師に求められる基本的な能力である。

プロセスレコードは、ひとつの経過記録である。プロセスレコードを活用することで、看護の場面を理解し、想起することができ、看護の再構成することができる。

すなわちプロセスレコードを活用することは、ある場面の患者と看護師との関係を内面から見つめる作業であり、自己の振り返りをするためのひとつの方法といえる。

プロセスレコードには、なぜこの場面を取りあげたか、どのような援助の方向性を見出そうとしたか、患者の言動、看護師の感じたことや気づいたこと、看護師の言動、考察の欄が設けられており、学生はその場面を想起しながら、記入していくことになる。

7. 3. 教材の内容

宮本（2003，p15）は、「看護者がプロセスレコードを記述することにより第三者の評価を取り入れた自己評価をすることにより、意図的なかかわりが、患者にとっての必要な援助を考えることになり、専門職としての能力の向上につながる」ことを述べている。

そこで、プロセスレコードを活用した授業を実施することにした。

本研究の授業の対象は2年生である。実習は1年次の10月に1週間の基礎看護学実習Ⅰと、2月に2週間の基礎看護学実習Ⅱを実施している。

本研究の実践授業は11月に実施したため、実習からは時期が過ぎていた。そこでプロセスレコードを日常生活の中の場面を取り上げて記述させることにした。

プロセスレコードには特に気になった場面を記述するように指示したので、実習場面が取り上げられる可能性もあるのではないかと考えたが、本研究の授業では記述に実習場面は取り上げられていなかった。

プロセスレコードの用紙と評価の視点を記述した用紙を学生に配布し、記入内容の説明を行った。そして学生に書くことに意義があるという重要性を伝え、なぜその場面を取り上げたのかを具体的に記述するように指示した。

また評価用紙を使用し他者との関わりについて考えながら記入することによって、最終的には看護師として患者との関わりについて考えてもらうことを期待した。

7. 4. 結果と今後の課題

42名の学生が提出したプロセスレコードの記述内容と、学生の記述した「自分が感じたこと・考えたこと」、「自分の言動」、「考察」をチェックし、評価用紙にコメントとアドバイスを記入し次回の授業で返却した。

以下に、了解の得られた31名の学生の書いた場面、その場面を取り上げた理由と自己の振り返りについて記す。

最も目立った場面は、家族、友人、親しい人、教師、アルバイトの関係者との会話場面であった。

振り返りの内容は、以下の通りである。

① 相手の立場に立って話を聴くことが大切である
② 相手の気持ちを知ることが大切である
③ 相手の言葉や気持ちを聴き、何を考えているのか知ろうとする気持ちが大切である
④ 相手を思いやることで気持ちがすっきりする
⑤ 自分の意思を相手に伝えることが大切である
⑥ お互いに影響しあっていることがわかった
⑦ 話を聴くことは難しい
⑧ 自分の性格的特徴を知ることができた
⑨ 時が過ぎても忘れられない出来事（嫌な思い）があった

プロセスレコードの記述内容には、自分を客観視することができ、いかに相手の話を聴いていなかったか、また、相手の気持ちを知ろうとしていなかったかということに気づかされたという内容が多かった。

そして、以前から気づいていた自分の性格的特徴が明らかになり、改めて自分への振り返りができたという内容もあった。

授業では、学生が記述したものをまとめてそのまま提示した。記述結果から、学習目標であるプロセスレコードの意義がほぼ理解された。また、プロセスレコードに書かれた内容には、青年期にある両親や友人らとの関係の様子が記述されており、教師として学生への理解を深めることにもなった。

以上により、プロセスレコードに記述する作業をとおして、自己を客観視することができることが明らかになった。

一般に、学生は自分の言動に対する意識はできても、その意識に沿って行動を変化させることは難しい。しかし、自分の性格的特徴などを含めて、行動の特徴や傾向を知ることができれば、今後の人間形成や看護者としての態度形成技術に役立つと考えられる。これは、P. クラントンの提唱する「意識変容の学習」に通じるものである。

7. 5. 問題点と今後の課題

プロセスレコードは学生の内面にかかわる問題であるので、本授業ではプライバシーを保護するため、プロセスレコードを用いた授業ではグループ学習を行わなかった。そのため、学生に対して表現することを促すことが不十分であった可能性がある。

しかし本研究では、お互いを理解しあうことで、学生間の人間関係を円滑にできることが明らかとなっている。したがって、今後は、教師が学生にプロセスレコードの内容への意見交換の意義と倫理的配慮を充分に説明し、意見交換が行える環境を整えることが必要であると考える。

8. 全体の考察

精神看護学は、精神科領域のみだけでなく、人の望む生活をその人らしくいきいきと過ごせるように援助することを目標に、全ての人に共通した精神の健康に関する学習をする学問である。そして精神看護の役割は、人の自立を育む支援を行うことである。

人が自立をするために援助する際、その人の人権や尊厳を守ることが、前提条件として存在する。そのため、看護師は常に倫理的観念をもっていなければならない。

筆者は、すべての看護師が倫理的観念をもつためには、看護師自身が一人の人間として自立していることが望ましいと考え、また常に自分の行為に対し、振り返りを行うことができる人間でなければ、他者の自立を育む支援にかかわることはできないと考えている。

このような学生を育てるために、教師は日々の学生との関わりに気を配らなければならない。また教師は、学生が物事を理解していくとき、そのプロセスに添って待つこと、見守ること、信頼すること、そして学生の個を知ることを通して、学生の自立に向けた支援を実施する

ことができると考える。

入院生活を送っている患者の生活の場は、病院である。看護師にはこれを理解し、患者の立場に立って看護を実施し、患者の状況を考えることが求められている。

これは、学生が教師から支援されることと同様といえる。筆者は、学生が教師から日常的に支援されていることを実感していれば、人間を理解することの根本を体得していると考え、それこそが学生の自立を支援することにつながっていると考える。

教師は学生が直面している問題を明らかにしようとする時、その要因や全体像を把握し、学生が自ら問題解決をするための支援をする必要がある。

学生の問題は、他者が解決するのではなく、学生自身がその問題を認識し、問題解決に取り組むべきである。しかし、しばしば学生は、問題解決を避けることがある。そのような時、教師は学生自身が自身の問題を意識化し、自らの問題として受け止め、その問題に向き合えるように見守ることが求められている。教師が学生に対し、その時その場で感じたことを伝えれば、それが考えるきっかけになることもあると考える。

学生が自分を意識し始めることは、様々な問題に取り組むための原動力となる。教員が問題解決を提案し、関わったとしても、問題の所在を明らかにし、解決に導くのは学生自身である。

学生自身が受け入れられるような事柄や問題について、自ら決定して取り組むことは、成人学習の学びにもつながる。このようなかかわりに置いて教師の見守りは、学生の自己決定に良い影響を与えるものと考える。

アンドラゴジー論は、教師に学生に対する思い込みを気づかせ、新たな学生との関係の創造を促す理論である。

学生が育った環境や今までの生育歴、社会性、将来をどう捉えているのかなどを、教師が把握することで、「いま、ここ」に存在する学生と理解を深めることができると考える。

そして、教師が学生の思考・身体・心が一体となるような教育方法を確立することができれば、学生は実感と共感に導かれた学びができるものと考える。

9. 今後の課題

本研究では、精神看護教育において、新聞記事、視聴覚教材、プロセスレコードを活用した授業を実践し、学生が考えたことや気づいたことを意味づけるのは、学習する側の学生であり、その学生を成人学習者として支援するのが教師の役割であるという考えに至った。

また、真に学生が主体性をもつ授業を実践するためには、学生の興味、関心がもてるような教材を教師が精選し、提供することで、学生の意欲をかきたてるような授業の組み立てをする必要があり、さらに、実践した授業について、学生自身が学習している学びのプロセスを確認しながら振り返りを行うことで、教師も学習の進め方を具体的に検討することができることを実証した。

今後よりよい授業の実践を目指し、成人学習者である学生の学びを一層深めるための教育を研鑽していきたいと考える。

また本研究を進めるにあたり、改めて文献を検討し、学生への教師のかかわり方や学生の主体性について再考することができ、学生を支援する教師のあり方についても再認識することができた。

今後は、本研究で得た知見をもとに、成人学習者を対象とした看護教育における教育方法や、学生が学習プロセスを振り返り自己決定を促すことを支援する教育方法を検討していきたいと考える。

これらの教育が実践できれば、学生は精神看護の臨床場面で、精神障害者の自己決定権を促す支援ができると考えるからである。

そして、学生がこれらの学習プロセスで得た経験を臨床現場で活かせるような、教育現場と臨床現場をつなぐ方法についても確立していきたいと考えている。

謝辞

本論文の作成にあたり、塚本榮一教授、藤村久美子教授、吉岡昌明教授、三輪建二教授など、多くの皆様の御指導に感謝します。また、実習で出会った患者さま、実習と講義に参加してくれた学生の皆様に、深く感謝いたします。

引用参考文献

池邉　敏子他（2002）「精神障害者の体験談を取り入れた授業からの学び」、『岐阜県立看護大学紀要』第2巻1号、104-110.

伊藤　博（1985）『援助する教育』明治図書.

糸賀暢子他（2004）「精神看護学授業におけるビデオ教材の意義」，日本看護学教育学会誌、Vol14,182.

鹿毛　雅治編（1997）『学ぶこと教えること』金子書房..

(2000)『＜自己＞を育てる真の主体性の確立』金子書房.

教育実践臨床研究（2003）3『授業の中で起きていることを確かめる』藤沢市教育文化センター.

川野　雅資編集（2005a)、『精神看護学Ⅰ』、NOUVELLE　HIROKAWA.

(2006b)、『精神看護学Ⅱ』、NOUVELLE　HIROKAWA、31.

佐伯　胖（1995a)『「学ぶ」ということの意味』岩波書店.

佐藤　学（1996)『教育方法学』，岩波テキストブックス.

坂田　三充（1989)「精神科看護教育の特性と学生の意識」,『看護教育』,医学書院,30/9,526-530.

シルビア・ナサー、塩川 優訳（2002)『ビューティフル・マインド　天才学者の絶望と奇跡』新潮社.

ジーン・レイブ他、佐伯 胖訳（1998)『状況に埋め込まれた学習　正統的周辺参加』、産業図書.

杉森みど里（1999)『看護教育学』第3版，医学書院.

鈴木　浩美（2004)「新聞記事をグループで比較検討する授業展開の実際とその効果」、『看護教員と実習指導者』第1巻3号、4-14、日本看護学会論文集34回、335-337.

鈴木　浩美（2003)「複数の医療事故に関する新聞記事をグループで比較検討する授業の効果」『日本看護学会論文集第34回看護教育』53-55.

仙田志津代他（2006)「看護学生の精神障害者に対するイメージ」『つくば国際短期大学紀要』34輯、202-210.

ドナルド・ショーン（2001)『専門家の知恵』ゆみる出版.

中谷　千尋他（2003)「精神障害当事者が参加する授業の成果」『山梨県立看護大学短期大学部紀要』Vol9,No.1、49-60.

中村　雄二郎（1992)『臨床の知とは何か』岩波新書,62.

P．クラントン著／入江直子他監訳（2003)『おとなの学びを拓く』鳳書房、204.

入江直子／三輪健二　監訳　(2004)『おとなの学びを創る』鳳書房.

布佐真理子他（1997)「看護教育におけるケアリング概念についての検討」，聖路加看護大学紀要,No23,16-23.

藤岡　完治（2002)『看護教育の方法』医学書院.

(2000)『関わることへの意志』明治図書.

藤原　顕（1999)「教育技術にかかわる教師の実践的知識―教育学における教師の知識研究の観点から―」,『Quality　Nursing』, Vol.5, No.7.

堀喜　久子・屋宜譜美子編（1999)『わかる授業をつくる看護教育技法1講義法』医学書院、24－25.

堀　薫夫・三輪健二（2006)『新訂　生涯学習と自己実現』放送大学教育振興会、137.

前川　幸子（1998)「看護学生とどうかかわるか」『看護教育』、医学書院、39/3、194-199.

M・ノールズ、堀　薫夫他監訳（2002)、『成人教育の現代的実践』鳳書房、38－39.

宮本　真巴（2003)『感性を磨く技法Ⅰ看護場面の再構成』、日本看護協会出版会、15.

吉田　喜久代（2001-4)「学生が主体的に学ぶ授業をするために教師は何を準備するか」,『看護教育』.

米澤美貴子他（2001)「教師と自助グループ・当事者の摂食障害の授業での学生の学びとニードの実態」『聖隷浜松衛生短期大学紀要』第24号、38－49.

URL」 NIE HP・http：
//www.pressnet.or jp/nie/aboutnie/effect.htm.